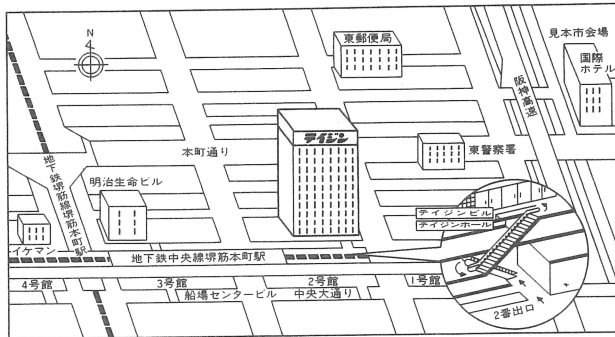
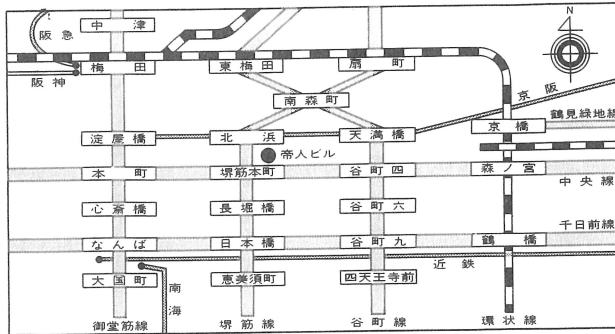


第24回 近畿川崎病研究会

日 時：平成12年3月4日(土)
14:00~19:00

会 場：テイジンホール
大阪市中央区南本町1丁目6番7号
TEL 06-6268-3131~3132

帝人ビルディングテイジンホールご案内地図



地下鉄中央線・堺筋線の堺筋本町駅東口から専用通路がございます。(東側2号出口)

共 催 近畿川崎病研究会
帝 人 株 式 会 社

— 近畿川崎病研究会 —

第24回 近畿川崎病研究会会長

鈴木 淳子

運営委員長

横山 達郎

運営委員

上谷 良行	上村 茂	越後 茂之	荻野廣太郎
奥野 昌彦	尾内善四郎	片山 博視	北村惣一郎
清沢 伸幸	米田 正始	佐野 哲也	篠原 徹
四宮 敬介	嶋 緑倫	清水 達雄	杉本 久和
鈴木 淳子	津田 悦子	鄭 輝男	寺口 正之
富田 安彦	内藤 泰顯	中川 雅生	中島 徹
西岡 研哉	服部 益治	馬場 國藏	濱岡 建城
藤原 久義	古庄 卷史	槇野征一郎	松下 享
松田 暉	松村 正彦	三好 麻里	村上 洋介
横山 達郎	吉林 宗夫		

顧問

神谷 哲郎	川崎 富作	川島 康生	田村 時緒
濱島 義博	森 忠三		

事務局

〒100-8585 東京都千代田区内幸町2-1-1
帝人(株) 医薬医療事業本部内
TEL 03-3506-4868

— 参加者へのお知らせとお願い —

1. 参加者へ

- (1) 研究会開始時間は午後2時です。
- (2) 研究会参加費は1,000円です。なお、本会に未入会の方は入会の程お願いいたします（年会費は3,000円です）。
- (3) 本研究会は、日本小児科学会認定医研修単位として3単位となっております。

2. 演題発表者へ

- (1) 口演時間は討論を十分に行いたいと思いますので5分をめぐりをお願いいたします。
今回は例年に比べ多くの研究報告があり過密なプログラムとなっておりますので、大変申し訳ありませんが口演時間の厳守にご協力のほどお願いいたします。
- (2) スライドは35m/m版用とし、原則として13枚以内をお願いいたします。また、1面のみを使用とします。

3. 口演者へのお願い

口演内容は、Progress in Medicine 7月号（ライフサイエンス・メディカ）に掲載される予定ですので、次の要領でまとめて下さい。

執筆要項：400字詰原稿用紙にて、図表は別で12枚以内にまとめて下さい。また、200字以内の英文抄録を付して下さい。

原稿締切：平成12年4月30日（後日、ライフサイエンス・メディカよりあらためてご連絡いたします。）

問合せ先：(株) ライフサイエンス・メディカ 日村昭仁

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-67 コスモス青山

TEL 03-3407-8963

プログラム

14:00～14:50

座長 上村 茂 (和歌山県立医科大学)

1. 意識障害を主訴として来院した両側巨大冠動脈瘤、心筋梗塞の1例

関西医科大学付属香里病院 小児科

吉村 健、野木俊二

国立循環器病センター 小児科

高室基樹、津田悦子、越後茂之

小松病院 小児科

原田佳明

2. 川崎病の急性期に間質性肺炎像を認めた1例

京都市立病院 小児科

安 炳文、清水次子、田村真一、立花佳代、納谷真由美、

岡野創造、北条 誠、川勝秀一、大久保秀夫

3. 最近経験したガンマグロブリン大量療法不応の川崎病2乳児例

京都大学医学部 小児科

岩朝 徹、土井 拓、野崎 浩二、飯田みどり、中畑 龍俊

近畿大学奈良病院心臓血管病センター 小児科

吉林 宗夫、米村 俊哉

医仁会武田総合病院 小児科

神谷 一郎

4. 超大量ガンマグロブリン (1g/kg/日×3日) 療法が奏効せず、
心筋炎による心不全をきたし、ステロイドパルス療法を施行した
川崎病の1男児例

市立豊中病院 小児科

三木和典、黒飛俊二、永井利三郎、谷口真理子、嶋田恵子、
福田麻子、申 耕嗣、本田敦子、松岡太郎、原 達幸

5. ガンマグロブリン投与にもかかわらず脳炎・巨大冠動脈瘤をきたした
川崎病の一例

吹田市民病院 小児科

川井正信、小野寺隆、西川達郎、藤崎弘之、松崎香士、
松本義男

6. γ -グロブリン超大量投与後心不全を呈した川崎病の一例

市立豊中病院 小児科

嶋田恵子、黒飛俊二、谷口真理子、福田麻子、申 耕嗣、
本田敦子、松岡太郎、三木和典、原 達幸、永井利三郎

14:50～15:40

座長 津田悦子 (国立循環器病センター)

7. 突然死により初めて診断された川崎病の一例

日野記念病院 小児科

西島節子

滋賀医科大学 小児科

藤野英俊、中川雅生

滋賀医科大学 法医学

西 克治

8. 脳梗塞を合併し、繰り返す冠動脈内血栓に対し

経皮的冠動脈内血栓溶解療法を施行した川崎病の1乳児例

天理よろづ相談所病院 小児科

須田憲治、松村正彦、新宅教顕、山中忠太郎、清水 健、
奥野毅彦、南部光彦、高橋泰生、太田 茂

9. m i d C A B Gを施行した両側巨大冠動脈瘤の1例

日本赤十字社医療センター 小児科

菌部友良、土屋恵司、稲毛章郎、東 浩二、今田義夫、
麻生誠二郎

都立府中病院 小児科

小太刀康夫、横路征太郎

杏林大学 小児科

赤木美智男

大和成和病院 心臓血管外科

南淵明宏

10. 後遺症を持たない川崎病罹病児の追跡をどうするか

— 父親が医師である罹病児の追跡状況からの考察 —

近畿大学医学部 心臓小児科

篠原 徹

11. 川崎病患者においてdipyridamole 負荷心筋シンチグラフィーを

用いた長期的予後

近畿大学医学部 心臓小児科

福田 毅、横山達郎、篠原 徹、中村好秀、三宅俊治、
福原仁雄、田里 寛、谷平由布子

12. 川崎病心筋梗塞後の電子ビームCT (EBT) 所見の変化についての検討

国立循環器病センター 小児科

遠藤彦聖、塚野真也、石川雄一、高室基樹、津田悦子、
小野安生、新垣義夫、越後茂之

国立循環器病センター 放射線診療部

田中良一、高宮 誠

大阪大学 機能画像診断学

内藤博昭

15:40 ~ 16:00 【コーヒーブレイク】

16:00 ~ 16:05 事務局報告

16:05 ~ 16:50 座長 越後茂之 (国立循環器病センター)

特別講演 1

【川崎病手術が教えてくれたこと】

国立循環器病センター 北村惣一郎 先生

16:50 ~ 17:35 座長 西岡研哉 (大津赤十字病院)

13. 近畿地区における γ -グロブリン療法の動向について

近畿川崎病研究会 アンケート調査小委員会

清沢伸幸、荻野廣太郎、尾内善四郎、神谷哲郎、西岡研哉、
古庄巻史、横山達郎

14. 川崎病急性期の治療と入院期間・冠動脈障害の検討

関西医科大学附属洛西ニュータウン病院 小児科

畑埜泰子、荻野廣太郎、黒柳裕一、藤原 亨

関西医科大学附属病院 小児科

寺口正之、小林陽之助

15. 川崎病に対するガンマグロブリン超大量静注法における

冠動脈病変予測スコアの有用性

大阪医科大学 小児科

森 保彦、片山博視、村田卓士、玉井 浩

生駒総合病院 小児科

清水達雄

16. ウリナスタチン療法の川崎病冠動脈病変予防効果について

岐阜県立多治見病院 小児科

中野正大、野田映子、上條善則、小久保義一、林 幸恵、

安藤光広、岩城利充、豊田桃三

17. 激症型心筋炎と急性拡張型心筋症患者に対する免疫グロブリン療法

京都大学医学部 医学研究科循環病態学

岸本千晴、塩路圭介、藤田正俊、篠山重威

奈良県立奈良病院 救命救急センター

丸橋裕之

山口県済生会下関総合病院

藤井万葉、村重明宏

国立循環器病センター 内科心臓部門

武田 宏、安田 聡、野々木 宏

17:35～18:15

座長 鈴木淳子（東京通信病院）

特別講演 2

【高安動脈炎における細胞性免疫機序－川崎病との類似性－】

東京大学医学部循環器内科 世古義規 先生

18:15～19:00

座長 佐野哲也（大阪厚生年金病院）

18. 当院における初回免疫グロブリン治療不応例に対する追加治療の検討

関西医科大学附属洛西ニュータウン病院 小児科

荻野廣太郎、畑埜泰子、黒柳裕一、藤原 亨

19. 川崎病のグロブリン追加療法とグロブリン製剤の治療効果の検討

名古屋第二赤十字病院 小児科

岩佐充二、福田 革、岩田直美、安藤恒三郎

20. ガンマグロブリン不応の川崎病例には超大量療法のみで

対応すべきなのか？

－プレドニン併用療法の経験からみた考察－

東京慈恵会医科大学 小児科

野中善治、衛藤義勝

21. 初回ガンマグロブリン治療不応例について；再治療の方法、

成績および不応例の定義等について

神戸市立中央市民病院 小児科

齋藤 潤、冨田安彦、深谷 隆、山川 勝、芳本 潤、
箕浦貴則、前田晴子、西尾利一

22. ガンマグロブリン療法不応例への追加投与方法の検討

京都府立医科大学附属小児疾患施設内科部門

小澤誠一郎、濱岡建城、坂田耕一、山元康敏

京都第二赤十字病院 小児科

清沢伸幸

京都第一赤十字病院 小児科

生田治康

松下記念病院 小児科

粕淵康郎

社会保険京都病院 小児科

中島文明

にっぽんの血液製剤です。

献血であることの誇りと重責……



指定医薬品

血漿分画製剤

献血由来 静注用免疫グロブリン製剤



献血ベニロン[®]-I

Kenketsu Venilon[®]-I

〈乾燥スルホ化人免疫グロブリン〉

薬価基準記載

生物学的製剤基準

本剤は、献血による貴重な血液を原料として製剤化されたものです。問診、感染症関連の検査等の安全対策を講じていますが、血液を原料としていること由来する感染症の伝播等の危険性を完全に排除することはできないことから、疾病の治療上の必要性を十分に検討の上、必要最小限の使用にとどめようお願いします。〔使用上の注意〕の項参照 ●ご使用に際しましては、製品添付文書をご参照下さい。

冷蔵保存から室温保存になりました。

禁忌 (次の患者には投与しないこと)

本剤の成分に対しショックの既往歴のある患者

原則禁忌 (次の患者には投与しないことを原則とするが、特に必要とする場合には慎重に投与すること)

本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者

総発売元・販売

TEIJIN 帝人株式会社

医薬医療事業本部 〒100-8585 東京都千代田区内幸町2-1-1
資料請求先: 帝人(株)医薬医療事業本部学術情報部

製造元・販売



化血研 薬化学及血清療法研究所

〒100-8568 東京都千代田区千代田1-1-1
Phone 03-344-1211 / Fax 03-344-1345
資料請求先: (財)化学及血清療法研究所営業管理部

資料請求先: 帝人(株)医薬医療事業本部学術情報部

(財)化学及血清療法研究所営業管理部

VE16-9908 作成年月 1999年11月

すべらせて、切る。



気道潤滑去痰剤 / 徐放性気道潤滑去痰剤

指定医薬品

薬価基準記載

ムコソルバン[®] 錠・液・シロップ

Mucosolvan[®]

〈塩酸アンブロキシール〉

気道粘膜の潤滑化に着目した新しいアプローチ

効能・効果

〔錠・液・Lカプセル〕○下記疾患の去痰
急性気管支炎、気管支喘息、慢性気管支炎、気管支拡張症、肺結核、塵肺症、手術後の喀痰
喀出困難
〔錠〕慢性副鼻腔炎の排膿
〔シロップ〕○下記疾患の去痰
急性気管支炎、気管支喘息

用法・用量

〔錠〕通常、成人には1回1錠(塩酸アンブロキシールとして15.0mg)を1日3回経口投与する。なお、年齢・症状により適宜増減する。
〔液〕通常、成人には1回2mL(塩酸アンブロキシールとして15.0mg)を1日3回経口投与する。なお、年齢・症状により適宜増減する。
〔シロップ〕通常、幼・小児に1日0.3mL/kg(塩酸アンブロキシールとして0.9mg/kg)を3回に分けて経口投与する。なお、年齢・症状により適宜増減する。
〔Lカプセル〕通常、成人には1回1カプセル(塩酸アンブロキシールとして45mg)を1日1回経口投与する。

使用上の注意

※1.副作用

〔錠〕効能・効果が各種疾患の去痰では、承認時及びその後の6年次報告までの安全性評価対象例数26,340例中138例(0.5%)に160件の副作用が認められた。主な症状は胃不快感24件(0.09%)、発疹20件(0.08%)、嘔気11件(0.04%)等であり、副作用とされた臨床検査値の変動は血圧上昇1件(0.01%)であった。効能・効果が慢性副鼻腔炎の排膿では、承認時の安全性評価対象例数142例中7例(4.9%)に7件の副作用が認められた。報告された症状は胃部不快感1件(0.7%)、胃痛1件(0.7%)、腹痛1件(0.7%)等であり、副作用とされた臨床検査値の変動はなかった。
〔液〕承認時及びその後の使用成績調査での安全性評価対象例数347例中8例(2.3%)に11件の副作用が認められた。主な症状は嘔気3件(0.9%)、嘔吐2件(0.6%)、腹痛2件(0.6%)等であり、副作用とされた臨床検査値の変動はなかった。
〔シロップ〕承認時及びその後の4年次報告までの安全性評価対象例数1,654例中8例(0.5%)に10件の副作用が認められた。報告された症状は下痢2件(0.12%)、嘔吐1件(0.06%)、腹痛1件(0.06%)等であり、副作用とされた臨床検査値の変動はGOT上昇1件(0.06%)、GPT上昇1件(0.06%)等であった。
〔Lカプセル〕承認時の安全性評価対象例数556例中16例(2.9%)に17件の副作用が認められた。報告された症状は悪心2件(0.4%)、胃痛1件(0.2%)、食思不振1件(0.2%)等であり、副作用とされた臨床検査値の変動は、GOT・GPT上昇3件(0.5%)、Al-P上昇1件(0.2%)等であった。

※1997年11月改訂

●詳細につきましては製品添付文書をご参照ください。

製造元・販売

TEIJIN 帝人株式会社

医薬医療事業本部 〒100-8585 東京都千代田区内幸町2-1-1



提携

ベリンガンゲルハイム国際社
イングルハイム アム ライン(ドイツ)

資料請求先:

帝人(株)医薬医療事業本部学術情報部

MU12Z9605

作成年月 1999年5月